

---

# 殲劍伝

NOCK

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殲剣伝

### 【Nコード】

N4824Y

### 【作者名】

N O C K

### 【あらすじ】

栄光の中を走り抜けていた少年は、ある出来事のせいで、最底辺を這う者へと成り果てた。

『落伍者』などと蔑まれ、それでも過去の栄光に縋るかの様に剣を振る少年は、やがて青年となったが、やはり鬱屈とした日々を過ごしていた。

かつての仲間は出世して、今はまみえることもなく、ただただ迷

宮に潜り、その日の糧と負債の返済分を稼ぐ日々。

これは、そんな人生を送る、才能も運にも恵まれなかった男が、ただひたすらに아가き続ける物語である。

## 序章

「いくよ、レンマ！ ジャカ！」

「ああ！」

「応よ！」

長い黒髪を翻して駆ける少女に応えて、レンマは迷宮の滑らかな石畳の地面を蹴った。レンマの隣では、親友の人狼族のジャカも愛用の斧槍を構えて追走してきている。

目指す敵は、赤色のブラッド・ミノタウロス。ここ、セリウ王国における一番大きな迷宮『主迷宮』の五十階層まででは最強の敵だ。赤い肌に赤茶色の剛毛が生え、その頭からは捻くれ立った黒い角が二本伸びている。何よりその筋骨隆々の体は、見あげなければ全貌を捉えることができないほど大きい。軽く、自分の五倍の体軀はあるだろう。恐らくは自分一人ならば一瞬で屠られるだろう強敵である。

だが、レンマの胸に恐れはない。一人では敵わずとも、五人でならどんな敵だつて倒せる。そんな自信を持てるほどにレンマを合わせて五人の攻略パーティ『黎明騎士団』は優秀だった。三年の時を共に生きてきた彼らのチームワークは、他の有象無象のパーティとは比べ物にならないだろう。

自分より遙か先を疾走していた少女、サクラが軽やかに地を蹴る。燦めく銀閃。

彼女が愛刀を抜き放つと、息もつかぬ間に三連の剣撃が繰り出された。さすが、剣姫などと持て囃されることはある。戦いの中であつて、彼女の剣閃は咲き乱れる華の様に美しかった。

美しさだけでなく、威力も並ではない剣撃である。ミノタウロスが苦鳴と怒号を織り交ぜた咆吼をあげた。

それに怯むことなく斧槍を腰だめに構えるのは、獣人のジャカであ

る。彼は吠える敵に張り合うかのように呻り声を上げながら牛鬼に挑みかかった。

「うおりゃあああ！」

ミノタウロスの強靱な皮など意に介さず、ジャカは鋭く槍を突き上げた。ミノタウロスの、その毛深い赤黒い巨体が大きくよろめく。獣狼族であるジャカの、人族とは一線を画する膂力から繰り出される槍撃である。それは、常人ならば傷をつけることすら難しいブラッド・ミノタウロスの皮を容易に貫通した。

大きく体勢を崩したミノタウロスの隙を、レンマは逃さなかった。全力を込めてレンマは手に持つロングソードを振り下ろす。ミノタウロスの体に刃の喰い込む確かな手応えを手の内に感じ、レンマは口元を吊り上げた。

「ウゴアアアアアア！」

袈裟懸けに斬りつけられた牛頭の巨人が吠える。怒りに駆られながらその腕に持つ大斧を力任せに振り下ろした。レンマとジャカはすぐさま飛び退くが、その一撃は、頑丈な筈の迷宮の岩盤を抉り、大量の土石を吹き飛ばした。それら瓦礫の一つ一つが、並みの冒険者が昏倒してしまうほどの威力をもっている。

だが、レンマ達にその攻撃が届くことはない。後ろに控えていた仲間の一人が、文字通り神の業のような早業で瞬時に光の結界を構成したのだ。瞬くその結界は、レンマ達に降りかかるうとしていた瓦礫をはじき飛ばした。

「サンキュー、クロウ！」

彼らの後ろに控える結界の主の少年は、ジャカの威勢のいい感謝の言葉を受けてにこりと微笑む。大陸において、最も信仰される神オラセウスを奉じる主神教の僧侶。その中でも一際若くして司祭の位を預けられた少年の祝福は、常に彼の仲間に厳然たる守護を与えていた。

「うん。助かった」

内心ヒヤリとしていたレンマも、クロウに感謝する。

「それほどでも。でも、もうちょっと退いた方がいい。そこだと結界抜くレベルの余波が行くよ」

何の、とは聞き返さない。長めの金髪に燐光を纏わせているのクロウの隣で、足首に届くほどに伸ばされた白髪が波立っている。膨大な魔力を無造作に練り上げている少女が、楽しげに唇をつり上げていた。口の形だけで、「よ・け・て・ね」などと伝えてくる。彼女が何をしようとしているのかを悟った二人は、渦巻く魔力に表情を硬直させた。

「おいおいおいおい」

ジャカは獣耳をせわしなく動かすと、ペタリと伏せる。尻尾は丸めて足の間へ。

「マジかよおお!?!」

必死の形相でレンマたち前衛が飛び退ったところに、極大の火球がミノタウロスに炸裂した。たぶん、色魔術の赤五掛あたりの、豪炎球だろう。

「相変わらず無茶苦茶するなあ……………」

あまりに豪快すぎる魔法運用にレンマが苦笑していると、ジャカの怒声がそれを遮った。

「笑い事じゃねえって！ 尻尾が焦げた！ おいハララ、てめえはいつもいつも……………」

自慢の尻尾を焦がされかけたことに非難の声を上ているジャカに、ハララと呼ばれた白髪の少女がけらけらと悪戯っぽく笑うと片手の平を顔の正面に立てた。

「めんご！ でも、当たんなかったからいいじゃん？」

「良い訳あるかあ!?!」

「ちよつと、ジャカ!」

尚も言いつのろつとするジャカに、クロウが待ったをかける。

「なんだよ!?!」

「後ろ後ろ」

ジャカが振り向けばそこには、皮膚を焼かれた牛頭が憤怒の眼差

しで彼を見下ろしていた。

「おおっ……」

無防備な体制になったジャカに、容赦なく敵は斧を振り下ろす。

「ジャカ！」

慌てて助けに入ろうとしたレンマに先駆けて、宙を舞う影。相変わらず美しい流線を描いて、彼らのリーダーである彼女は飛んだ。

「全くもう……」

翻る黒髪。それを追うかのように燦めく銀閃、その数五つ。

「戦闘中だよ、ジャカ、レンマ。気を抜いちゃダメでしょ」

穏やかに仲間を叱咤する。その傍ら、銀閃は花びらの様に散り、ミノタウロスの丸太の様な腕を斬り飛ばした。

あまりに鮮やかな、華麗に舞うかのような剣技である。レンマは思わず陶然と見とれた。

その視線を知ってか知らずか、少女は艶やかに笑みを浮かべる。

「たたみ掛けるよ！」

その声に、我を取り戻したレンマは愛剣を構え直す。全身から煙を上げ、武器諸共腕を失った敵である。もう、そこには戦闘前の偉容など見受けられない。

レンマは自分の周りを一瞬見回す。

クロウは守護の結界を編み直しているのか、聖印を切っている。

その隣で、ハララがにやにやしながらいくつも魔法球を形成していた。

ジャカは斧槍を振り回し、片腕のミノタウロスと鎬を削っている。

そして、レンマの正面では、黒髪の剣士の少女が彼を振り返っていた。

「行こう、レンマ！」

「うん！」

レンマは声を上げて答えると駆けだした。

僕たち五人に、倒せない敵はいない。そんな全能感を感じながら、彼は牛頭の巨人に向かって剣を振り下ろした。

絶叫を上げながら、倒れ伏すミノタウロス。その様を瞳に収めると、レンマは快哉を叫んだ。

「やったな！ みんな！」

そう言っつて仲間を振り返った瞬間。レンマは目が覚めた。

世界が曖昧に、遠くなっていく。幻想が薄れ、現実が像を結んでいく。いつの間にか四人の仲間は消え去り、牛頭の巨人も消え去っていた。周りにあるのは、ただただ暗闇のみ。

レンマは未だ朦朧とする意識を頭を振って覚醒させると、目を見開いた。

「夢……か」

そこは、とある郊外の古迷宮の一室だった。なぜ、自分がなぜこんな所に居るのか、と未だに寝ぼけた頭でレンマは思案する。なぜもなにも、体力回復の為にと数時間前に仮眠をとったのだった。数分の休息のつもりが、思わず寝入ってしまったらしい。

仮にも迷宮で、無防備な身を無様に晒してしまっていた。その事に舌打ちを一つ漏らす。堅い床で眠ったせいか、身体も固くなって若干痺れていた。

引きずる様に、革鎧に覆われた身体を起こす。周りには彼以外の人間は居ない。そんな事はこの六年で当然となっているのに、何故か寂寥感を覚えてしまった。

「ばかばかしい」

昔の夢を見たせいだろうか。と、益もない事を考えて、レンマは苦笑した。

信頼しあっていた仲間たちと、迷宮を駆け抜けていたあの頃の記憶。それは色褪せず彼の心に刻まれている。人生で一番幸せだった頃の夢だ。

「それにしても……」



ずいぶんと、酷い、悪夢である。

救いようもない。その言葉を、昔の夢を見た自分に向けたのか、それとも昔の彼自身に向けたのか。彼自身わからないまま自嘲する。優秀な仲間たちに助けられていた事に気づかず、自分も仲間たちと同じ優れた存在だと思い込んでいた。あの頃の自分を思うと、どうしようもなく苦い気持ち心が満たす。

今日はもう少し奥の階層まで進もうか。と思う。どうしてか、めちゃくちゃに剣を振り回したい気分だった。

夢の中では仲間と共に輝ける未来を追っていた少年だった。だが今のレンマは、ただ日々の糧を稼ぐためだけの、独りきりの冒険者だった。

序章（後書き）

## 第一話

今でも、性懲りもなく夢を見る。

鮮やかな姫剣士と、

勇猛な獣騎士と、

いたずら好きの五色魔導師と、

穏やかな主教司祭と、

何にも代えがたい仲間達と迷宮を駆けたあの日々を。

どうしようもなく、焦がれて、焦がれて、もう手に入らないあの日々を。

失ってしまったあの日々を、まだ性懲りもなく夢に見るのだ。

〈殲剣伝〉

第一部 『落伍者』

黄金の肌に緑の瞳を持つドラゴンを神獣として奉る王国「金竜国セリウ」。この国には、その首都である王侯貴族の住まう都市「ジンリュウ」と共に、国の中核を成す都市が存在する。

迷宮都市「オウリュウ」である。

ジンリュウに隣接する、陽竜国セリウに存在するほぼ全ての迷宮を擁する都市オウリュウは、冒険者にとっては一攫千金の地である。また、大陸全土の商人達にとっても、商売の一等地である。自然と人や物が溢れ、迷宮を中心に街が大きく広がっていた。

この世界で、迷宮が鉱山の様に国家資源として認められる様にな

つて久しい。王国セリウにとって、オウリュウは格好の収入源だった。

命を賭してでも迷宮に飛び込む冒険者は後を絶たない。その冒険者の持ちだす魔晶石やモンスターの素材の加工品などは、この国の経済の基盤の一つとなっていた。

そんな迷宮都市、オウリュウの一際雑多な街中にレンマは住んでいた。

レンマは、夜を徹して潜っていた迷宮から戻って来た。早く自宅の毛布に包まりたい欲求に苛まれながら、疲労しきつたからだを引きずって歩く。周りは冒険者向けの商店街が広がっている。

日中や夕暮れ時には、行き交う冒険者や客引きの声で賑わう通りだ。だが、未だ日も明けやらぬ早朝で有る。道を往く人はおらず開いている店も極少ない。

そんな、極少ない例外に当たる店の一つに、レンマは用があった。武器店『ロックアックス』。

商店街でも一際煤けた店構えをしているそこが、レンマの目的地である。

この早朝から店は開いているが、自分以外の客がこの時間に入りにしているのを見たことがない。もっと冒険者が活動し始める時間帯に開けた方が、繁盛するだろうに。

などと思うが口には出さない。わざわざこんな時間に店を開けてくれる店主に、不要なことを言っただけ開店時間を遅らせられたら厄介である。

蝶番に相当ガタがきているのか、獣の唸り声の様な音を立てるその扉を押し開ける。レンマは店内に入っていくと、武器に使われている革と、油の匂いが鼻を突く。

「まあたテメエか……」

迎える声音は歓迎からは程遠く不機嫌なものだ。ガンス・ロック

アックス、この武具店の主の名である。

表と同じく煤けた店内は、お世辞にも掃除が行き届いているとは言えない。床を歩けば埃が舞いそうなほどだ。しかし、壁際に置かれた棚に納められた武器類だけは綺麗に手入れされており、閉まりきらなかつた扉から差し込む朝日を受けて鈍く輝いていた。

その、多くの棚が並べられた店舗の奥に、これまたヤニやら油やらで汚れた大きなカウンターが鎮座している。筋骨隆々のドワーフ店主がそこで仏頂面を貼りつけ腕を組んでいた。

もうドワーフの年齢でも初老に位置するはずだが、その髪も髭も黒々としており、目は爛々と輝いていた。鍛冶の炎の色が移ったかのように赤らんだ肌は固くしなやかなめし革を連想させる。

レンマは、店主から放たれる不機嫌のプレッシャーに気圧されながら、固い口調でおおずと用件を切り出した。

「……また、剣を売って欲しいんだ」

差し出された手には、刃こぼれだらけになったロングソード。刀身もいくらか曲がってしまっており、さらに先から中ほどまでに巨大な亀裂が入っている。

「ここ二、三日、どことなく刃筋がぶれてきたな、と感じてはいたが、とうとう先の探索での戦闘で寿命が来たらしい。」

「性懲りもなくまた持ってきたか……」

ガンスは、ドワーフらしく伸ばした髭面の奥で苦々しげに悪態をつくと、レンマを睨みつける。

「お前は一体何本俺の剣を駄目にすりや気が済むんだ？ え？」

壊れた剣の柄でカウンターを叩きながら、怒声を上げるドワーフ。レンマは首をすくめておおずと答える。

「折りたくて折ってるわけじゃないんだけど……」

ガンスはレンマの顔に浮かぶ鬱々とした表情を不愉快そうに一瞥して、けつと吐き捨てた。

「武器が折れる呪いっつんだろ？ それが本当に神様とやらが掛けた呪いってんなら、もう冒険者なんて続ける理由なんざ無いだろ

う。そんなザマ晒すくらいなら、他の仕事でも探したらどうだ」

ガنزのは辛辣な言葉を吐く。しかし、レンマはただ首をすくめるだけである。同じ様な台詞は、この六年間で飽きるほどに聞かされてきた。だからレンマは、卑屈な笑みを浮かべて、いつも通りに気のない返事を返した。

「そうだね。考えておくよ」

放った皮肉に堪えた様子が無い為か、髭面の店主は舌打ちと共に苦々しげに毒づいた。

「……つち、とつとと代金置いて帰りやがれ」

その手には、真新しい鉄製のロングソード。先ほどレンマが渡した物と同型のものである。れ

およそ、接客態度としては誉められた物ではないが、それでも、レンマにとっては物を売って貰えるだけでありがたかった。とある事情により、この都市でレンマに剣を売ってくれる、というより、物を売ってくれる店は非常に少ないのである。

レンマは新しい剣を腰に帯びると、背を向けた店主に礼を言っって店を去った。

「呪い……か。ほんと、加護なんて欠片も与えてくれなかったくせに、ケチな神様だよな」

追い立てられるように武器屋を後にしたレンマは一人ごちる。

『武装破戒』と呼ばれる呪いがある。

持つ武器がまるで持ち主を厭う様に、自らを腐らせ破滅していく呪いである。

それは、信望する神の信条を侵した者に降りかかる。

守護の神を奉じる聖騎士が、私利によって人を殺めた時。

闘神を奉じる剣闘士が、戦いに臆した時。

神は自らの信条を侵した者から、神その武器を奪う。

そして、加護は取り上げられ、戦いの場に戻る事はできなくなる。故に、その呪いを受けた冒険者は、はこう呼ばれるのだ。

……「落伍者ドロップアウト」と。

レンマの奉じていた神は、至剣神プラグマ。かつて人の身でありながら、鍛錬に鍛錬を重ねる事で、神を打ち倒した英雄神の一人である。また、レンマの使う剣術『至剣流』の開祖とされていた。その神プラグマの司る信条つかさじは、「不退」「誠心」「錬磨」であった。

レンマはその神の信条を侵し、『武装破戒』の呪いを受けた。すなわち彼は、「不退」の信条を破った「臆病者」であり。

「誠心」を失った「不実な者」であり。

「錬磨」を捨てた「怠惰」であると目される。

『落伍者』と、そう侮蔑を受けるのである。

そして、その評価は概ね正しい。と、レンマは自覚している。六年前の全てが変わった日、レンマは人々を裏切り、逃げ、力の足り無さに慟哭した。

ギルドからは謀反人の烙印を押され、人々からは卑怯者と蔑まれた。だから、呪いを被るのも当然だと考えていた。

持つ武器はことごとく朽ち果て、人々からは蔑まれる。そんな中でも、レンマは未練がましく迷宮で剣を振る。

先ほどガンスに諭されたように、本来なら武器を捨て、違う生き方を探すべきである。それをわかっていながら、レンマは剣を捨てることができないでいた。

「……未練だな」

自分は、かつての仲間のように才能に溢れていなかった。剣にしてもそれは同様である。

同門の剣士、サクラは誰もが認める剣の天才だった。レンマの非才の駄剣とは、比べるのも愚かしい程に。

それでも剣を取ってしまうのは、あの頃の輝かしい記憶を忘れられないからか。

もしかしたら、まだ自分に隠れた才能が眠っているとでも期待しているのか。

そうだったら、愚かしいにも程がある。

そんな風に、自らを嘲ると、レンマは歩みを早めた。

一晚迷宮に潜っていた体は、猛烈に休息を欲している。早く薬類や食料を補給して、泥のように眠りたい。

レンマは、それらを補給することができる、この時間に開店しているもう一つの奇特な店に向かう。

体を引きずる様に、背を丸めて、人生の敗北者の様に鬱々とした足取りで。



## 第二話

万屋「千客万来」

大仰な店名の割りに、雑多に物の溢れる小汚い店である。

猥雑な他の店にさらに埋もれる様に、商店街から一本路地に入つた所にその店はあつた。

店構えはパツと見、とても商売をやっているようには見えない程に廃墟じみている。さらには、店の名を示す看板すら存在しない。

さもありません。この店はまともな人間相手に商売できない商人が、まともではない人間を相手に商売をする店なのだから。

レンマはぐるりと周囲を見回すと、こそこそそのボ口屋に入つていった。

「おはよう、店長」

埃や壁から垂れ下がる葉草、またそれとは違う得体の知れない匂いのする何かひしめく店内に入ると、もう随分と顔なじみになつてしまつた店長が顔を出した。

「やいや！ いーらっしやいませ、レンマ様。毎度ご贖頂きまして嬉しい限り」

揉み手をしながら近づいてくるその者は、身長がレンマの腰ほどしかない。ホビット族である。

ホビット族にしては珍しい毒々しい程に赤い髪だが、それは乱れ、所々禿上げっている。乱れつぱなしの髪に対して、手入れされ細く伸ばされている髭がいやに浮いている。さらには隻眼で、片目は眼帯で覆っていた。

本来朴訥で温厚な種族と評されるホビットであつたが、彼を見るかぎり、その論評にも例外があるということがよく解る。そのおどろおどろしい外見は、ジンリュウあたりに住む貴婦人が見れば、引きつけでも起こしかねない。

そんな彼だったが、レンマにとっては大事なパートナーである。日々の稼ぎも何もかも、彼の協力が無ければ金銭にすることはできないのだから。

レンマに対してあれこれと甲高い声で世辞を並べ立てているギリンに対し、手を振ることとその言葉の羅列を止めると、レンマは背負っていた革袋を店のカウンターの上に置いた。

「今日の収穫、精算してくれ」

手短に要件だけ告げるレンマにも、ギリンは不快感を顔にすることなく、その黄色いやにの浮いた歯を見せてにやりと笑う。

「かしこまりてで御座います。……けっへへ」

耳障りな笑い声を浮かべながら、一度頭を下げて、ギリンはレンマの革袋の中身を物色しだした。中身は、レンマが一晩迷宮に潜って集めた戦利品の数々である。

「ふむふむ。今回は……相変わらず代わり映えがしませんなあ」

「放っておけ」

煩わしそうに返したレンマに頓着せずに、ギリンはぶつぶつと何やらつぶやきながら、内部空間拡張を施された革袋から中身を次々とカウンターに並べている。

「魔晶石が六百単位ほど……ですかね。これは後で測るとして、オークロードの精巣が八個にハーピーの風切羽が三本……火炎猿の毛皮が二つ、おお！ これはトロールですか？」

ギリンが革袋の口を大きく広げて一抱えほどもあるオークの頭を取り上げた。大きく醜い顔に、落ち窪んだ目が埋まっている。

「ああ、たまたま遭遇してね……、前にトロールの頭がそこそこの値段がつくって聞いたから持ってきた」

本当は、いたたまれない夢を見たせいでむしゃくしゃして、無理に挑みかかったのだ。むろん、そのような事をこの店主に言う必要は無い。ましてや、思いの外手強くて、危うく返り討ちにされかけたなどは。

「ははあ……、そっぴやそんなことも言いましたかね」

ギリンは思い出したのか、ふむふむとごちながら、それもカウ  
ンターに置いた。

「まあコイツは銀玉ぎんぎよく二個ってところでしょうかね」

「な！ それだけか!？」

以前は銀玉八個で売れるなどのたまっていなかったか。レンマ  
は愕然として声を上げる。

「それだけでも何も、トロールの頭を飾る流行はちよつと前に廃れ  
ましたからねえ」

銀玉二個とは、今回新調した剣の二割程度の値段にしかならない。  
自業自得の部分があるとはいえ、剣一本に対してあまりにもしよつ  
ぱい稼ぎだ。

「いやいやいや！ 流石に安すぎるだろ!？ トロールだぞトロ  
ール。どれだけ足下見る気だよ!？」

レンマは必死にギリンに食い下がる。しかし悪徳ホビット商人は  
にべもなく交渉の余地はない。

「あつしがコレを捌くのも、それなりのルートを使うもんで、コ  
レ以上の値は着けれんです。……まあ最も、正規のルートで捌い  
てくれる表通りの店で売ればもう少しいい値段が付くかもしれませ  
んがねえ」

そういつて、ギリンはレンマを見上げた。勢いづいていたレンマ  
の口は、その一言でぴったりと閉じられる。さもありません、この街  
否、この国でレンマとまともに商売をしてくれる商人はほとんど居  
ない。レンマの首筋に押されている物と同様の刻印を持つ者は、  
正規の店での売買を拒否されるのである。

『鎖持つ竜の手』の刻印。レンマの首元に刻まれたそれは、セリ  
ウ王国において罰を受けている者を意味する。セリウ国内において、  
過失や事故などで社会に甚大な損害を負わせた者に、その損害を一  
生かけて償わせるための物である。

紋章を刻まれた者……人々は『罪荷者』と呼んでいるが……

は、社会における様々な市民の特権を奪われ、市民の最下層の人間として日陰で生きていくことが運命づけられる、

この刻印も、六年前の事件の置き土産である。自分の弱さのせいで、多くの人々を死に追いやってしまった報いであり、その罪の証明だった。

この印を持つ者に、人は差別的だ。レンマが物を売ろうにも、普通の店では取り合ってすらもらえない。

ではなぜ、ギリンの店では者の売買ができるのかと言うと、それはギリンの首筋にもレンマと同じ刻印が存在することが理由の一つである。蛇の道は蛇、日陰者には日陰者の住む世界がある。

ここでなら、レンマは正規の店よりぐっと安い値段であるが、それでも物を売ることができる。ギリンも、レンマの戦利品を、闇市場で捌くことによって利益を得ることができなのだ。

「じゃあ、いつもお世話になってますんで大サービス！ 銀玉二つに銀貨五枚！ これでどうでしょう？」

大して増えてない、とうな垂れる。レンマはどうしようもないほどに今日の収支が赤字であること悟ると、深いため息を吐いた。

「わかったよ……、その値段で頼む」

「ひひっ、まいどあり！」

最初から、レンマが折れるしかないのだ。レンマは悪徳店主の差し出した対価 銀玉六つと銀板三枚、銀貨五枚 を手にするとうなだれながら万屋『千客万来』を後にした。

とりあえず、もう赤字の事は考えたくない。レンマはとつと家に戻って、全てを忘れて眠りたかった。

「やれやれ、毎度あり〜」

遠ざかっていくレンマの背を見送ると、ギリンは隻眼をぐるりと回した。

「しかし、罪荷者の身で、しかも呪い持ちで、よくもまあ每晚迷宮に潜って生きて出てきますなあ」

それは呆れにも似た感嘆。普通、罪荷者という者は、女なら娼館にでも入って日銭を稼ぐか、男なら後ろ暗い商売に手を染めるか奴隷に身を落とすかだ。それがなかなか、彼はしぶとく日々を冒険者として生き抜いているらしい。

あれほどの非難を受けて、未だ剣を捨てることなく、呪われながらも迷宮に挑む姿は、滑稽に見えながらも、どことなく嘲り難い。

「しかし、かの黎明騎士団の団員様が、こつちも落ちぶれてしまつとはねえ……」

ギリンは思い出す。六年前、冒険者としての人生を謳歌していた少年の姿を。それは、先ほど背を丸めて店を出ていった青年のそれとは似ても似つかつた。

ギリンは一人、世の不条理に思いを巡らす。

「たった一人、落ちぶれて罪荷者。他のお仲間は皆さん出世して天上人……か。まったく、世知辛いねえ、人生つてのは！」

彼はそう吐き捨てる、カウンターに置いてあったトロールの頭をぺしり、とはたいたのだった。

### 第三話

「なんで、なんであんなだけが生き残った？ 皆死んだのに、なんであんなだけ……」

少女が嘆く。

「あの時、あんなについて行かなければ、死なずにすんだんじゃないか！」

青年が詰る。

「あそこで何が起こったのか『忘れた』だと？ フザケるな。そんな言い分で誰が納得する！」

男が激昂する。

「だまれだまれだまれ！ あんたの言葉を誰が信用すると思ってる？ その呪いが、罪印が、何よりあんなの裏切りの印じゃないか」  
女性が呪う。

「最低だな、あんな」

「卑怯者……！ 裏切り者……！」

「所詮君が、『騎士団』の彼らと並び立つのは無理だったのだよ。才能も住む世界も、君の様な『落伍者』とは比べるべくもない」  
人々が次々と彼を罵倒する。

彼は体を丸め、もう止めてくれと、耳を塞ぎながら蹲うことしか出来なかった。

憎しみと怒りを向けてくる人たちに、なんとか釈明しようと口を開くが、言葉が出ない。

見れば、人々の伸ばした手が、彼の首を締め上げていた。

「返せ」「返せ」「返せ」「返せ」「返せ」「返せ」

その言葉は、怨嗟は、自分たちの大事な人々を奪われた憎しみに充ち満ちている。

彼は涙を流しながら「許してくれ」と口を動かす。しかし、残念ながら喉からは声として出ることはなかった。

いよいよ、締め付ける力が強くなってきた。レンマは、遠くなる意識を手繰りながら、助けを求め。すると、人垣の向こうで仲間たちと目が合った。

彼は、助けを求めて、彼らに手を伸ばした。

その懇願はしかし、彼らに届くことはなかった。

仲間たちはレンマなど意に介さないかのように、歩み去っていった。

絶望する。その後、

レンマは自分の首の骨の折れる音を聞いた。

はつとして、レンマは抑えていた首筋から手を離した。目に映るのは木目の天上。見れば、正午を過ぎた自らの部屋の中だった。どうやら飛びつきりの悪夢を見ていたらしい。

全身に嫌な汗をかいている。夢など見れないほどに疲弊したと思っていたのに、不条理なものである。

なぜだか眠る前よりも重くなったように感じる体を起こして、レンマは二、三度頭を振ると、ベッドボードに置いてあった水差しを引き寄せる。そして、空であることに舌打ちする。

しょうがない、とレンマは水差しを片手に、裏手の井戸まで歩いていった。

彼のねぐらは、迷宮都市オウリュウの、主に下流階級の人々が集う集落『龍の尾』の、さらに外れである。

大陸最大の迷宮である『主迷宮』や、それに次ぐ規模の『竜迷宮』にもほど近く、『ロックアックス』や『千客万来』が存在する商業区も近いその場所は、ただ迷宮に潜り続けることだけを考えれば非常に好条件の立地であるといえる。

しかし、上流階級の冒険者や貴族、上級市民たちが住む高級住宅

地区である『竜頭』や首都ジンリュウから避けるように中心区から遠くに位置している。そのため、首都への距離がそのまま地区の優劣に結びつくこの国において、『龍の尾』は貧民たちが住む地区となっていた。自然、周辺では日々事件やらいざこざが巻き起こっている。

そんな物騒な地区にある彼の家は、風通しが良すぎる程に良いあばら屋だったが、男一人住む分には申し分のない設備の整った物件だった。特に、井戸と剣の稽古用の広場が付いていることから、レンマはそこそこの家を気に入っていた。もちろん、ジンリュウあたりの住民からすれば、自分の家の犬小屋よりも見窄らしいと評価するだろうが、レンマからしたらどうでも良いことである。

むしろ、知り合いの経営する万屋よりは大分ましだろうなどと考えていた。

レンマは庭先で裸になると。井戸の水で体を洗う。清らかな乙女でもなし、その様を覗き見ようとする不埒な輩など居ようはずもない。また、重ねて言えば、このような町外れに今まで人が訪ねてきたこともないので誰に憚ることはない。

体を拭いて、服を着ると軽く体を伸ばす。すると、最悪だった寝覚めも多少は振り払えた様で、少し気が紛れてきた。

「さて、と」

だいぶ時間が早いが、出かける事にした。レンマは革鎧を着込むと、昨日買ったばかりの剣を腰から下げる。

そういえば昨日、赤字のシヨックから薬類や食料を買うのを忘れていた。それも補充しなければいけないだろう。出費がかさむ、とレンマはため息を吐いた。

「今日は昼の探索が出来ればいいんだがなあ……」

レンマの一日は、迷宮探索を取り仕切るギルドに向かうことから始まる。



迷宮資産の保護などという名目で、一度に規定以上の冒険者が同じ迷宮に入る事をギルドは規制していた。そのため、どの迷宮に潜るにしても、事前の予約が必要となるのだ。

もちろん一度に迷宮に潜れる人数が制限されている手前、冒険者を名乗る者は我先にとこの予約の為にギルドに殺到する。そして、ほぼ全ての一般冒険者が、日中の探索を希望するのだ。

日が沈んでから迷宮に潜ろうとする者はめったに居ない。その理由に、街の生活サイクルとは別に、夜半における迷宮探索があまりにも危険であることが挙げられる。

迷宮のモンスターは全て、常に仲良く徒党を組んでいる訳ではない。身内同士で殺し合いなどもするし、多種族を食ったりする事もある。

しかし、理由はわかっていないが、そこに外側の生き物、人間を投入すると、その行動理念が底から変化する。全てのモンスターは敵対していたモンスターから、標的を人間に変更するのである。

全てのモンスターは結託して、人に集中攻撃するようになる。それに対抗するために、ギルドはパーティの結成を推奨し、昼に大勢の冒険者を迷宮に侵入させることでモンスターの標的を分散させているのだ。

逆に言うと、他のパーティが入りたがらない夜半に、一人で迷宮に潜るとなれば、その階層全てのモンスターの標的となる可能性がある。その危険性は、あえて言葉にする必要は無いだろう。

レンマも好き好んでそのような危険を侵したいと考えている訳では無いので、昼に迷宮ればと、望みが薄くともギルドに顔を出すようにしているのである。

ここで問題なのが、レンマが罪荷者であると言っ点である。罪荷者は、全ての公共サービスにおいて他の一般人とは比べものにならない程のペナルティを被る。そしてそれは、冒険者ギルドに置いても同じことが言えるのである。

例えば、一般冒険者の予約とレンマの予約が被った場合、一般冒険者のものが優先される。これは、例えレンマの予約の後に予約を入れてきた際にも適用される。なので事実上、レンマが昼に探索する事ができる機会は滅多に無い。

それでも性懲りもなく昼の探索に向かうのは、本当にごくごく稀に、突然昼の予約を解消するパーティが出ることもあるからなのだ。その時は、比較的安全な昼の探索を行うことができる。

今日もレンマは、そのごくごく少ない可能性を頼りに、真昼の街路をギルドに向かっていくのだった。

## 第四話

「どうやら、今日も夜中に迷宮に潜る羽目になるらしい。」

「……シリアさん、やっぱり無理か？」

「無理ね。キャンセルも出ていないし。それに仮に出ても直ぐに埋まっちゃうもの」

「ここは、オウリュウの中心地に位置する、一際大きな施設。冒険者ならば必ずと言っていいほど利用する『冒険者ギルド』である。」

ギルドは総石造りの頑丈な建物で、様々な窓口や施設が連なっている。建物の入り口の側では、出入りの業者や流れの商人が露天を開いており、客を呼び込む声が飛び交っていた。

その冒険者ギルドにおいて幾種も存在する窓口の一つ、『迷宮管理課』の前で、レンマはうな垂れていた。昼間に迷宮にもぐれないか、儂い望みを賭けたわけだが、たった今、迷宮は満員状態である旨を告げられたのだ。無慈悲にその宣告を下したのは、レンマの良く知る昔馴染みの受付嬢だった。

レンマは、深くため息を吐くと、受付のカウンターにもたれかかった。

真昼間と言うこともあり、窓口を訪ねる冒険者はまばらである。なので傍から見れば、探索を怠けた冒険者が受付嬢相手に駄弁っているようにしか見えない。

受付嬢、ハーフェルフのシリアは、青みがかったショートカットを揺らして腕を組み、難しい顔をした。

「この先一ヶ月間も、日中はほとんど予約で満杯よ。潜れる時間帯は夜しかない」

その言葉に、レンマは首を振る。わかりきっている事とはいえ、事実を突きつけられれば落ち込むのである。

「そうか……。まあ、しょうがないな。やっぱり夜に潜ることにするよ」

そう言って苦笑するレンマにだったが、しかし、それに応じる受付嬢は苦い顔だった。

普段なら、「そうね」と諦めた様に言っただけの手続きをしてくれる。その彼女は、今日は少々以上にお節介だった。

「……ねえ、何度も言うようだけど、そろそろ違う仕事を探したらどう？ 毎日深夜の迷宮に潜って、必要以上に身を危険に晒してまで、続ける必要があるとは思えない」

彼女の顰めた目に思慮が浮かぶ。レンマが冒険者になった頃から、ずっと顔馴染みである彼女である。きつと心配してくれているのだろう。彼女は、レンマが罪荷者となった今でも、気安く接してくれる稀有な人物だった。

彼女が手助けしてくれなければ、冒険者を続けて行くことなどできなかつただろう。そんな彼女が、唐突に職の鞍替えを提案してきたのだ。普段と違う彼女の雰囲気、レンマは困惑した。

「九年間、なんだかんだで冒険者として生きてきたんだ。今更、別の生き方なんてできないよ」

レンマは、腰の剣の柄をぽんぽんと叩く。それに、と皮肉げに口元を歪めながら続ける。

「俺に限っては、迷宮はこれ以上ない安全な稼ぎ場なんだよ」

「迷宮では、どんな事が起こるか分からない。慣れた頃が一番危ないのよ。……って、あなたが冒険者登録をした時に言った覚えがあるわ」

懐かしい頃の話に、レンマは目を少し細めた。

「覚えてるさ。でも、知ってるだろ？ 罪荷者は迷宮入り口のテレポルト陣は使えない」

「……」

「探索に入ったら、正規の奴らみたいに適性階層にとべるわけじゃない。一階層から進んで行くしかないんだ。どんなに急いで階層を攻略しても、危険な階層どころか、適性階層に着く前に朝になるよ」  
そんな風に、自分で話してみても鬱になってくる。こんなものは」

『冒険』者とはいえない。

「せいぜい十階層ぐらいだ。一日で潜れるのは。一番強いモンスターでもオーク程度だよ。安全なんてもんじゃない」

冒険者には階梯<sup>レベル</sup>というものがある。これは、彼ら個々人の戦闘力の指標となる数字である。この、自分の階梯の数値から、迷宮探索における適性階層を判別することもできる。

基本的に、オウリュウでは、自分の階梯と同じ数字の階層が迷宮における適性階層であるとされている。

レンマの現在の階梯<sup>レベル</sup>は四十九である。つまりは彼の適性階層は、四九階と言っわけだ。しかし、レンマは容易にその適性階層に到達することはできない。

一般の冒険者ならば、探索を始めると、各迷宮の入り口横に存在しているテレポーター陣で自分の階梯に合った階層へ飛ぶ。しかし、罪荷者はそのテレポーター陣を使うことができない。これもまた、この国における罪荷者の被るペナルティの一つである。

結局、彼が適性階層に向かう為には、テレポーター陣を使わずに第一階層から、自分の足だけで迷宮を踏破しなければならぬ。力押しで強行軍で最短距離をどれだけ急いで攻略しても、せいぜい一日で十五階層ぐらいまでしか進めないだろう。

ちなみに、一般的なオークの階梯<sup>レベル</sup>はおよそ十から十五ほど。階梯四九のレンマからすれば、幼児の相手をするようなものである。つまりは、レンマは普段の迷宮探索において、情けないほどの安全マジンをとっていることになる。

迷宮に普通に潜れば（……）の話だが。

「俺は他の皆と違って、危険のない探索をしてるんだ。こんなの、『冒険』とは言わないだろう？ 遊んでるようなもんさ」

自らを揶揄する言葉も織りませて、シアアに安心しろと言っ。しかし、彼の「嘘」は残念ながら、ベテランの受付嬢には見破られて

いたようだった。じつとりと湿った視線が彼に向けられる。

「危険の無い、探索ねえ……。……。毎日、朝にボロボロになって迷宮から出てくる人の言葉とは思えないわね」

ぎよっとして、レンマが固まる。彼女のシフトは大体が正午から、日の入りを過ぎたぐらいままでである。レンマが迷宮に入る夜七時頃、彼女はぎりぎりギルドに居るが、その後すぐに家路についている筈なのだ。レンマが朝迷宮から出てくる時、どんな様子なのかを知ることが無いと黙っていた。

「朝番のコたちから聞いてるわよ。あなたが毎日迷宮から体を引きずって出てくるって」

どうやら、不要な事をした職員が居たようである。レンマは、居たたまれない気持ちで、頬をかいた。女性のうわさ話を防ぐことはできない。

密かに、シアには自分の無様な姿を知られたくないと思っていたのだが、もはやそんなことを考えるのも栓のないことである。

「驚いたな、シアさん以外の受付の人たちは、俺のことなんか気にもしてないと思ってたよ」

実際、いつも彼女たちは、受付に来る彼に対してそっけない対応をする。罪荷者に振りまくような愛想は無いということなのだろう。そんな彼女たちが、迷宮を出てくる自分の事を認識しているのは意外だった。

「あなた、目立つもの。色々な意味で」

もちろん、悪い意味だろう。レンマは気まずげに、首元の『鎖持つ竜の手』の刻印のあたりを引っ掻いた。

「まあ、そうかもな」

そう言っただけ誤魔化そうとそっぽを向くレンマを、シアはにらんだ。

「何か、危険な事をしてない？」

「してないよ。ただ単純に、長いこと潜ってるから疲れて出てくるだけ」

しばらく、二人の間を沈黙が支配する。

「まあ、何にせよ、今晚の迷宮探索の申請を頼むよ」

「……」

「……なあ、」

「危険な事、しないで」

沈黙に耐えられなくなったレンマが、言葉を重ねようとす。しかし、それよりも先に、切実なシアの言葉が発せられた。先ほどの強気の様子はなく、その目は悲しみがあつた。

「あなたは、絶対無茶してる。どんな方法かわからないけど、皆が思っているよりもずっと危険な探索してる。呪われた体で、制限を受けて。どうして、どんな理由があつてそんな事をしているのかわからない。……でも、それはきつと、あなたの命を縮めるわ」

どこまでも真摯に、彼をを心配する言葉だつた。それに対し、レンマは答えることが出来なかつた。六年の間、あくまで一冒険者と受付嬢として一線を引いて接してきた。なのに、その関係を、彼女はなぜ壊そうとするのだ。

レンマが彼女に、ただの職員として接して欲しいと望んでいることを知っていたはずだ。

しかし彼女は、レンマの事情に踏み込んだ。この六年で初めての事である。

レンマは、努めていつもどおり、何でもない風を装って彼女の言に答えた。

「無茶も、危険なことも、してない。女の子たちが少し大きさに言ってるだけだよ」

歯切れが悪い。だがレンマは、これ以上彼女に踏み込ませる気はなかつた。

彼女は、悲しそうな目で言い訳をするレンマを見つめている。レンマは、自分胸が引き攣っているような気がした。頭を抱えて、受付のカウンターにもたれる。

「どうして、今更そんなことを言うんだ。『シア』」

観念して、誤魔化すのを止める。レンマは、急に彼の事情に踏み込んできた彼女に問いかけた。呼ぶ名前は、六年前まで使っていたものである。

六年間引いていた一線を、この時だけレンマは元に戻した。そして、そんな彼に彼女は言った。

「わたしね、この仕事辞めるの」

その言葉に、レンマが顔を上げる。信じられない言葉を聞いた。「どうして……」

思わず聞き返したレンマに、彼女は泣き笑いを返す。

「赤ちゃんが、できたの」

そのときの、レンマの胸に浮かんだ感情は何だったか。きっと、あまり綺麗なものではなかったに違いない。

「そう、か」

ただ、平静を装ってレンマは頷いた。震えそうになる声を隠して、何とか祝いの言葉を口する。

「おめでとつ」

今わかった。なぜ彼女が、レンマに踏み込んできたのか。それはきっと、職場を去る彼女が、唯一の心残りを精算しようとしていたのだろう。

迷宮と言う名前の棺桶に、無謀に飛び込み続ける友人だった男。それがきつと、彼女のこの職場における最大の心残りだったに違いない。

そんな彼女の思いを汲み取って、レンマは謝った。

「そして、すまない。迷宮に潜って、剣を振り続ける以外の生き方が、俺には分からないんだ」

そう言って、彼女に苦笑を向ける。彼女はそれに微笑み返すと、諦めた様に言った。

「やっぱり、そう言うと思った」

無駄な努力だったわ。と笑う彼女。



「せめて、死なないように努力してね」

「ああ」

言って、レンマは背を向ける。そして、思い出した様に一言。

「あー、クロウにも、おめでとうって伝えてくれ」

そう言って歩き出す。彼女の方はもう振り向かない。自分が、どんなに情けない顔をしているか分からなかったからだ。

ギルドを出て、しばらくした所で歩みを止める。

「あいつと、彼女の子供ならさぞかし美形だろうな」  
頬を伝う涙が、なぜ流れるのか分からない。

彼女は初恋の人だった。昔、友人との恋の鞘当てに破れ、諦めた人である。

とつくの昔に失恋は済ましている筈なのに、涙が止まらないのは何故なのか。

それはきつと、孤独感。世界は、自分などと物ともせず回っている。そのことに対する疎外感である。

昔の仲間に、彼女に子供ができる。それはきつと幸せな家庭になるだろう。

しかし、罪荷者の自分は、それにならうことも、共に祝福することすらも許されないのだ。

『ドロップアウト  
落伍者』

その言葉の意味する所を、レンマは噛み締めていた。

## 第五話

暗い面持ちで『千客万来』に入ってきたレンマを、ギリンはいつも通りの陽気な挨拶で迎えた。

「やあやあやあ！ 旦那、今朝ぶりでございますな。今日は旦那がいらっしゃってから、相も変わらずお客が一人も来やしない。不精この私、キセルの葉ばかり無為に炊くばかりでして、いやいや、お恥ずかしい」

そう言つて、ふと、ギリンはレンマの顔を見る。そして、レンマの様子がいつも以上に消沈していることに気づいた。

「……何かございましたので？ いささか、ご機嫌がすぐれぬようですが」

レンマとギリンは、もう六年になる付き合いである。その間、ほぼ毎日顔をあわせているとなれば、ほんの少しの様子の変化に気づくこともある。基本的に普段のレンマも鬱々とした雰囲気漂わせているが、今日の彼はいつにも増して暗かった。

レンマはそんな目ざとい問いかけに、ほんの少し口元を歪めると首を横に降った。

「別に、大したことはないよ」

そう言いつつ、冴えない表情で鬱々とため息を吐く。

いつもの皮肉が出てこないレンマのその様子に、重症だなどギリンは内心ごちる。

ふむ、としばらくホビットらしく伸ばした髭の先を梳いていると、何事か浮かんだのか頷いた。

「まあ、何か嫌なことがあったのでしたら、酒でも買って飲んで、忘れてしまうのが一番でさ。いかがです？ 外来品の、米を使った酒が手に入ったんですよ」

そういつて振りかると、カウンターの裏の棚に置かれた褐色の瓶を持ち上げた。その中には透明の液体が、なみなみと波打っている。

「うんと強い酒ですんで、ぱあつとやるには一番です。きっと、世間のしがらみなど毛程も考えなくて良くなりますよ」

そう言って黄色い歯を見せるギリんに、ようやくレンマは少しの苦笑を漏らした。

「辞めておくよ。下戸なんだ。酒は飲まない」

少しは元気を取り戻したその様子に、ギリンは「残念」と笑うと、酒瓶を元の棚に戻した。

「それで、此度は何を求めでいらっしやる？」

その問いに、レンマが幾つかの品物を挙げていく。ほとんどいつも通りの買物である。

「ええと……、下級ポーション一箱、バンテージも一ダース。あと、携帯糧食の一番安いやつも一箱頼む」

その代わり映えのないメニューを聞いて、ギリンはため息を吐いた。

「旦那、ポーションとバンテージは良いとして、糧食はもう少しましな物にしたらどうです？ 犬の餌の方が、まだ味気があるって評判ですぜ」

栄養面と熱量を最優先した携帯糧食は、すべからず美味いものではない。しかし、それも最近は改善され、少し値を上げればまともな味のものも手に入るようになってきている。

しかし、このレンマという冒険者は、それでも古くなった麦を油で焼き固めた様な匂いと味の、最下級の携帯糧食しか口にしない。

「栄養は取れるから、いいんだよ。味だって、慣れればどうってことない。……金も無いしな」

そういって、レンマは笑う。そんな彼に、ギリンは視線を細めた。「……昨日は赤字だったかもしれないませんが、普段からそこそこ稼いでいるでしょうに。その稼ぎは、一体どこに消えてるんですか」

そんなギリんの問いに、レンマは答えることができなかつた。第三者が、その話に割り込んできたからだ。

「娼館に、でしょ」

十代半ばの少女が、いつの間にか店の入口に佇んでいた。赤褐色の髪を肩の辺りに垂らした彼女は、整った顔に侮蔑を浮かべてレンマの事を睨んでいた。

「よく、色街一の本店に通ってるのを見るもの」

「こいつは嬢さん。いらっしやい。今日も薬草を売りに来たので？」

「そうよ」

少女はレンマを睨めつけたまま言葉少なに答えると、肩から下げている革袋をカウンターに置く。彼女の服装は、野良仕事に適した布のズボンとシャツで、所々に泥がついていた。

初対面の筈の少女に、しかし親の仇を見るような目で見られている。そんな状況に、レンマは困惑した。

「なん……だよ？」

思わず問いかける。その問いに、少女はますます表情を歪めると口を開いた。

「まだ、死んでなかったんだ。あんた」

少女の形の良い口から出てきたとは思えない、辛辣な言葉にレンマは硬直する。

誰かの恨みを買う事に慣れてはいるが、ここまで露骨に暴言を吐かれたのは久しぶりである。

あまりの事に固まったレンマを見かねたのか、ギリンが割って入ってきた。

「お嬢さん、随分と威勢の良いことで結構ですが、お得意様どうしで喧嘩などなさらしないで頂きたいですな。商売は明るく楽しく、がうちのモットーなので」

少女はその言葉にふん、と鼻息荒くそっぽを向くと、ギリンの方に向き直った。

「それで、買値はいくらぐらいつくの？」

「そうですねあ……」

ぱんぱんに膨らんだ袋から、薬草の束をギリンはカウンターに積

んでいく。種類も、量もかなりのものだ。その値段を相場に照らしあわせて即座に暗算していくギリンは、モグリであったが商人としてはなかなか優秀である。

「モギの葉が十三束に、アカネ草が五束、リンの実が三十二個……、占めて銀貨五枚に銅玉五つといった所でしようかね」

「リンの実は今朝取ったものよ。この時期にこの量は貴重でしょ。銀貨六枚」

「……はあ、嬢さんにはかないませんよ」

ギリンは、レンマに対する時とは違って、やすやすと値上げ交渉に応じる。それに多少の不服を感じていたレンマだったが、不満を口にだす前に、そんな彼を会計を終えた少女がきつ、と睨みつけた。「なんだってんだ、さつきから」

流石のレンマも、理由もわからず敵意を向けられればむっとする。そんな彼に、少女は暗い恨みを目に灯して、彼を憎む理由を口にした。

「六年前、私の父さんは、あんたのせいで死んだのよ」

その呪詛から、彼女の素性が大体わかった。レンマが色町に通っているのを知っているのも道理である。

レンマは、彼女の恨み節を受けるのを厭うように、顔を背けた。

そんな彼に、少女はもう用は無いようだった。

「帰るわ。そろそろお金が溜まるから、例のもの、仕入れておいてよね」

「毎度あり。ですが、『あれ』は私では伝手が無いので難しい。他の店に行ったほうが良いでしょうな」

「……なら、そうするわ」

そう言って、最後にレンマを睨みつけて帰っていく。

「また明日、その男が居ない時に持ってくる」

その台詞を最後に、万屋の扉が閉められた。

ギリンは、ふうと一息を吐くと、レンマを見やった。レンマは、

少女の去っていった扉を見つめている。

「彼女の父は六年前の、あの事件で迷宮に潜っていた者の一人だそうです」

「そうか……」

レンマが力なく応える。

「親の仇を見るような目で、見られるのもしょうがないな」

自嘲して、天上を仰ぎ見た。

「父親の名前は、なんていったんだ？」

その問いに、ギリンが顎に手を当てて思索する。一拍置くと、思いついたようで手のひらの上に拳を当てた。

「確か、ゴータ・ソロエルとか……」

「っ!？」

その名前に、聞き覚えのあったレンマは驚愕した。思わずギリンの方を凝視する。

「ゴータ……?」

その名前を呼ぶ彼の声は震えていた。

「お知り合い、みたいですね」

「ああ……」

そう言って、レンマはその場にずるずるとへたり込む。

「そうか、あの子、ゴータの娘か……」

「ご存知だったのです?」

問いかけるギリンにレンマは弱々しく頷いた。

「ああ……。遠目だが、一度だけまみえたことがある。あの時はまだ、八歳だったが……」

「なるほど、父親を失って、色町に身を寄せましたか」

訳知り顔で頷くギリン。色町には、娼館だけでなく、様々な施設が混在する。その中に、国の中でも最も大きな孤児院があるのだ。

おそらくは、六年前の事件のあと、親の居なくなつた彼女はそこで暮らしているのだろう。彼女のように、その事件で親を失った子供たちは大勢そこを見を寄せている。

その子供たちはまさしく、レンマの罪の象徴だった。

「はは、」

僅かに乾いた笑いを漏らす。

今日は、随分と自分の過去の罪を見せつけられる。ギルドでは、自分の虚しさを。ここでは、自分の愚かしさを。

いやと言うほどに直面させられる。

六年も経ったのに、自分はひたすら地を這ったままで、何一つ変わらぬ。罪は薄れないし、間違いは覆ることはない。

時の流れは総てを忘れさせると言うが、そんなことはなく。日々悪夢に苛まれて、罪の意識はまるで池の底の泥のように蓄積していく。

「俺が、許される訳ないよな」

思いを馳せるのは、六年前。

国中を巻き込んだ大規模な作戦クエストの、一幕だった。

## 第五話（後書き）

まだまだ、説明話が終わらない……。早く戦闘描写が書きたいのに。今の所この作品は、鬱話がメインになってしまっているのでなかなか読者の方も増えませぬ^^；

次回は少し、過去の回想が入ります。

まだまだ、話の序盤の序盤で、書き用もないのも承知していますが、もしよろしければ感想など頂けると励みになります。



## 第六話 <過去編>

「主竜降臨の儀？」

「ああ、今朝王家から告知されたクエストだとさ。どうやら、王女殿下の主竜がついに降臨なさるらしいぜ」

愛槍の手入れをしながら、ジャカが今朝方、酒場の親父から聞いた噂を説明した。いつにも増して街の喧騒が大きいのは、その告知が広まっているかららしい。それほどまでに、そのクエストの話題は国民を沸かせているようだ。

レンマたちが住む国、陽竜国セリウ。この名は文字通り、この国が竜の加護によって反映してきた事に由来する。

セリウ国の王族は、一人一人に、一生のパートナーとして、『主竜』と呼ばれる竜族が、太古の王家との契約により竜神から遣わされる。主竜は王族の盾として、剣として彼らの力となり、また、友として、時には配偶者として王族と共に一生を歩むのである。

現在も、皇后陛下の主竜である『厳格なる竜』と呼ばれる竜族工二口スは、宰相として敏腕を振るっている。まさに、陽竜国セリウの象徴、それが主竜と王族の関係なのである。

『主竜』の降臨は、王族の子が年頃になるあたり、おおよそ十代の前半から半ばにかけて行われる。降臨の場は、セリウ王国の中でも二番目の規模を誇る『竜迷宮』。その五十階層の大広間に存在する祭壇である。時が来ると、その祭壇に主竜が降臨するのだ。

今回のクエストは、その祭壇の間まで、今回主竜を賜る王族を護衛する事である。おそらくはこの国に住む冒険者や兵士、騎士達にとって最高の栄誉に違いない。

「すごいな、王家主導のクエストなんて」

レンマが驚く。一冒険者にとって、王家なんてものは雲の上の存

在である。おいそれと相まみえるものではない。そんな人々が。大々的に衆目に姿を晒して、冒険者達と共に迷宮に潜るのだ。確かに、国中が湧くのも無理はない。

「そうでもないさ。実際に主導しているのは、どうせ貴族院のやつらやギルドの上層部だ」

そう言つて、ジャカは皮肉げに口元を歪める。実は、彼の実家『銀狼の家系フェニル』の一族も貴族院に名を連ねる貴族である。今は家出中の身であるとはいえ、このような時に動いている人々に心当たりくらいはつくのだろう。

実際に、国を実際に取り仕切っているのは貴族院とギルドであるのは周知の事実である。国の中枢を成す王家を擁護する貴族院と、国の産業の要である迷宮を管理するギルド。それらが権勢を誇るのも無理は無い。

対して王家はどちらかと言うと象徴的な立場に置かれており、政治に口を出したりすることは少ない。だが、そんな中であつてさえ、国民の王族への忠誠は多大なものがあつた。竜と言う神代の幻獣とともに、国を治める姿は国民に取つて誇りだつた。だからこそ、国中が王家主催のクエストにここまで湧くのである。

であるからして、今回の護衛に対する申し込みも引けをとらないだろう。事実、今現在も国中の冒険者達がギルドの受付に殺到しているらしい。

そんなクエストに臨もうとする冒険者たちに目をつけたのか、普段より更に武器防具や魔法薬が売れるとあつて、商人たちもこぞつてギルド前広場に露天を出している。ギルド前広場は、突如として現れた好景気に湧いていた。

「まるで祭りみたいだ」

レンマが感心して言う。行き交う人々も興奮した顔で何やら騒いでいたり、踊っていたりする。出店の屋台が立ち並び、色町からは妓女までもが客を呼び込む為に出張つてきていた。

「実際、祭だな。主竜様の降臨つてのは、それだけの大イベントだからな」

ジャカは目を細めて、街角で客を見定めている妓女の露出した肩や足を見つめている。その表情はだらしなくにやけていた。

「なに、にやにやしてんだか」

そんな風に、街行く人々を見やっていた二人に、横合いから声が掛けられる。どうやら、ようやく彼らの待ち人が現れたらしい。

「おせえぞ、二人共」

やや情けない姿を晒してしまったためか、少々顔を赤らめながらジャカが悪態をつく。

二人の待ち人、サクラとハララの二人は、そんなジャカの姿を見てくすくすと笑い合っている。

「まあったく、あんな脂肪の塊をぶら下げてる女のどこがいいんだか」

そう言つて、やれやれ、と首を振るハララの身体は紛うことなき断崖絶壁である。スレンダーといえば聞こえがいいが、ジャカに言わせればただの「幼女体型」である。もちろん、口に出せば向かいで売っている串焼きのごとくこんがり焼かれてしまう為、決して言葉には出さないが。

「ね、サクラもそうおもうでしょ？」

同意を求められた黒髪の少女は、困惑しながら曖昧に笑う。サクラのそれも、残念ながらハララに負けず劣らず小ぶりであった。

「あー、うん、えと、そういうのよく分からないから」

「またまたー、サクラ。共に貧乳の市民権を獲得しよう」と誓い合った仲じゃないですか」

「ふえ！？ い、いや、そんなことしてないじゃない！ ……ちょっと、ハララ！ からかったわね！」

頬を染めて怒るサクラ。そんな彼女の肢体に、レンマは目を走らせる。

(まあ、それはそれで悪くないんだけど……)

そんな風に彼女の身体を見つめている視線に気づいたのか、サクラは自分の胸元を隠すとレンマをきつ、と睨みつけた。

「えっち」

「んあ。いや、つい……」

思わずじつくりと見つめてしまっていたため、サクラに見咎められてしまった。レンマはしどろもどろで言い訳する。

「お、レンマはシーアさんみたいな、ぐらまーな女性が好みだと思つてたけど、こっちもイケる口かい？」

ここぞとばかりに、ハララがからかってくる。レンマは白髪の少女のにやにやとした笑いと、黒髪の少女のジト目に狼狽しながら、隣のジャカに助けを求める視線を送るが、彼は巻き込まれたくないのか、いやに熱心に愛槍を磨いている。

ついにレンマは追求に耐え切れずに、無理やり話題を変えた。

「それより、ギルド行ってきたんだらう。何かクエストもらえたのか？」

あらかさまな、レンマの話題変更に二人の少女はむうと頬を膨らませ不満を顕にする。

結局、サクラはしょうがない、と追求の銚を収めるとギルドの様子をレンマとジャカに伝えた。

「クエストもらう以前の話題。窓口は例のクエストの問い合わせをする人たちでこつた返してたわ」

その言に、ジャカがふんと面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「つたく、王家の護衛なんて大役、そこらの有象無象に務まるわけ無いだらう。どうせそついう役割は、貴族やギルドが内々に選抜してんだよ」

「えっ？ じゃあ、ギルドに告知する必要無いじゃないか」

レンマが驚いて訪ねると、ジャカは槍の穂先を磨いていた布を弄びながら答える。

「宣伝だろ、宣伝。実際、あの告知があった後、国内は未曾有の好

景気だ。民の気運を向上させようって腹だろっな」

「ほあく、成る程ねえ」

ハララが、ジャカの考察に感心する。

「そういう推察ができるってのは、貴族の坊ちゃんだけあるねえ」

「それを言うな。柄じゃねんだよ」

一言多い魔術師の少女に、ジャカはこめかみを引くつかせている。

「まあまあ、それより、どうしようか。このまま迷宮潜る？」

そんな二人をとりなして、レンマは仲間に問いかける。

「まあ、それもクロウが来てから決めようぜ。……しっかし、あいつも遅えなあ」

クロウは、彼らの仲間の神官だ。つい先日、若年ながら主神オラセウスを奉ずる主神教にて司祭の位を賜った。そのことで、一時期話題になった少年である。

「なんか、教会に寄ってくみたいなさ言ってたけど……」

サクラが昨日のクロウの言葉を思い出す。

「坊主の話は長いつて言うからねえ。もしくは、先日みたいにファンの女の子達に囲まれてたり」

ハララがにししと笑って言う。クロウは非常に見目がいい。その整えられた金髪と、翡翠の目は、整った顔を更に高貴なものに見せていた。

つい先日も、教会の司祭の叙任式の際に周りの女性達に良いように弄ばれていた。当のクロウは、「散々だったよ」と零していたが、レンマとジャカからすれば、「羨ましいやつめ」と思っほかない。ちなみに、オラセウスは愛の神なので、男女交際には寛容である。

「あいつも、早くシアアとの婚約を広めりゃいいんだ」

「はは、そうだね」

ジャカの言に、レンマが頷く。逆に、二人の少女が硬直する。

「……っ」

「……ばか」

言われて、ジャカは初めて自分の失言に気づいた。

「あ、やべ。……すまん。レンマ」

「あー、うん。実際、気にしてないよ。確かに悔しいけど、僕が玉砕したのは事実だからね」

そう言っつて、さすがに言葉足らずか、と思いレンマは続ける。

「クロウはいいやつだし、正々堂々競り合っつて負けたんだから、諦めもつく」

レンマとクロウは、少し前まで一人の少女に恋していた。ギルドの新人受付嬢、ハーフエルフのシアアである。二人は恋のライバルとして、お互いに競り合っつていたが、先日とうとうクロウが、彼女のハートを射止めたのである。

レンマも流石に数日は失恋に胸を痛めていたが、今となっつては吹っ切れている。しかし、仲間たちは未だに妙に気を回してくるので少し辟易としていた。

「おめえは割り切るのが早すぎんだよ」

ジャカは、どことなく呆れた様にため息を吐いた。隣ではサクラとハララも神妙にしている。

そんな、微妙になっつてしまった雰囲気の中、彼らの待ち人の、たっつた今話題に上がっつていた人物が現れた。

「ご、ごめん。みんな！ 教会から出たら女の人たちに捕まりそうになっつて……」

いつも整っつている金髪はぼさぼさに乱れ、神官服も気崩れしていた。その様に、全員が目を合わせると、一斉に吹き出した。

「え。え？ なんなのさ？」

神官の少年は困惑して、彼らに問いかけた。

「それで、教会での用時つてのは何だっつたんだ？」

ひとしきり、クロウの惨状をみんなで笑っつたあと、レンマがクロウに問いかけた。

「あ。うん、サクラに、というより『黎明騎士団団長』に手紙を預かっつた。何か貴族筋の人からのものらしいけど……」

クロウは少し慥然としながら、髪を直すと懐に手を入れた。

「手紙？」

「そう。……はい、これ」

クロウは折りたたまれ、封のされた手紙をサクラに手渡す。封筒自体には、送り主の名前が書かれていない。ただ、黎明騎士団団長殿、と宛名が書かれているだけである。

サクラは、ナイフで丁寧な封を開くと、手紙を広げた。そして、その手紙の上部に押された印に手を止める。一緒に手紙を覗き込んでいたハララが、それを見て驚きの声を上げた。

「ち、ちよつと、これ王家の印じゃない？」

「な、なんだと!？」

レンマ、ジャカ、クロウも驚愕する。サクラは少し震えた声で、手紙を読み始めた。

「『拝啓。黎明騎士団の諸君。日頃の諸君の活躍を評し、此度、「主竜降臨の儀」における、陽竜国第一王女、エミリア・リーオベルグ・セリウ殿下の護衛任務に抜擢する。以下の者たちはそれぞれ、定められた機関に出頭し、任務を受けること』……これ、例のクエストの参加要請じゃない？」

「ほ、ほんとだ。こんなことって」

クロウも驚愕に目を見開いている。

「ついに俺たちの活躍も、上の連中の知る所になったわけか」

ジャカはさも痛快と言いたげに、膝頭を手で打った。彼は、実家を見返す為に、市井で冒険者をやっているのだ。その感慨もひとしおだろう。

だが、手紙を読み進めるサクラの表情は、皆の喜びに反して硬くなっていった。その腕の震えが、少し大きくなる。

「『サクラ・ローアン ギルド長室にて出頭の後、宮廷にて叙任式』

サクラが手紙を読みあげていく。

「『クロウ・ロウ・エンラール オラセウス教会主教室に出頭の後、  
宮廷にて叙任式』」

クロウが頷く。彼が教会に出頭するのは、至極当然だ。

「『ハララ・ヨミネト ジンリュウ魔術学院学長室に出頭の後、宮  
廷にて叙任式』」

ハララがうえ、と顔をしかめる。ここ数ヶ月、学院をさぼって冒  
険している彼女にとって、最も行きづらい場所である。

「『ジャカ・フェニル 貴族院フェニル家本邸に出頭の後、宮  
廷にて叙任式』」

「ち、そうきたか」

家出しているジャカに、この内容の命令である。どうやら、実家  
も放蕩息子に業を煮やしているらしい。ジャカは悪態について苦々  
しく顔を歪めた。

それぞれ出頭場所が違うのは、おそらくその様に少なからぬ思惑  
が存在するためであろう。

ハララも、クロウも複雑な表情でサクラの声を聞いていた。

そこで、気づく。手紙を見つめたままのサクラの表情が真っ青で、  
震えていることを。

「サクラ……どうした？」

心配になって、レンマが言葉をかける。その言葉に、のろのろと  
サクラが顔を上げた。

「ないの」

「無い？」

聞き返す。レンマは、嫌な予感がした。

「レンマの名前が、どこにも！」

サクラが皆の前に手紙を翳した。そこには確かに、連ねられた『  
四つ』の名前。レンマの名前は、そのどこにも記されていないかった。



## 第七話 <過去編>

レンマは、親の顔を知らない。

物心ついた時から、彼はオウリュウの繁華街に住む、リンドと言う老婆に育てられていた。

両親は、彼が生まれて直ぐに、流行病で死んだと彼女に聞かされた。とはいっても、親と触れ合った記憶のないレンマは、その話を聞いても何も感じなかった。

彼にとって、家族とは老婆リンド以外に居なかったし、それでいいとも思っていたのだ。

育ての親であるリンドは、齢八十を超えて尚、その言動は矍鑠とし年齢を感じさせないほど活力が漲っていた。何でも、昔は王室の近衛騎士を務めていた程の剣士で、冒険者としても随分と名前が売れていたらしい。

彼女は寝物語に、レンマによく冒険の話をしてくれた。

彼は、時には、迷宮の奥底でうごめく怪物たちの話に身を慄き。

またときには、そんな怪物たちに勇敢に立ち向かう冒険者たちの英雄譚に胸を踊らせた。

幼かったレンマは、老婆のそんな冒険譚を聞く事が何より好きで、彼女が辟易とする程に話をせびつたものだった。であるからして、いつしか彼自身も冒険者に憧れ、リンドに剣の技を教えるよう頼み込む様になったのも自明の理といえる。

剣を教えて欲しいと言うレンマの頼みに、リンドは当初は反対していた。しかし、あまりにも彼が熱心に頼み込んだ為、ついには彼が十の年を迎える頃、彼に稽古をつける事を了承したのだった。

剣の師としてのリンドは、レンマが教えを乞うた事を後悔する程に厳しかった。

少しでも集中を乱せば容赦なく、木刀を叩きつけられ地を這わさ

れた。技に甘い所があるのなら、永遠に続くかと思える程に、剣を振らされ続けた。

そんな風に、レンマは毎日、剣を握ることができなくなるまで型を繰り返し、疲労困憊するまで剣を振り続けていた。その生活は苦しくもあつたが、同時に幸せでもあつた。レンマにとって剣を振る時間は、己の活力が充実した、この上なく好きな時間であつたからだ。

「お前には剣の才能は無い」

レンマは再三リンドにそう言われていた。その言葉は事実であつたが、レンマはそんな事は気にしていなかった。剣を振るのはそれでも楽しかつたし、まだ幼かつたレンマは、それがどれ程大きな障害であるのか把握していなかつたからだ。

そんな風に、稽古づけの毎日を送っていたレンマのもとに、ある日、新しい弟子が入ってくる。

両親に連れられて、入門した少女はリンドの孫にあたるらしい。何でも、身体が弱く病弱で有るため、少しでも体力を付けたいというのが、入門の理由であつた。

リンドはやはり入門を渋つたが、結局折れて、少女に稽古を付けることとなつた。

黒髪の美しい、気弱そうな少女は、その名をサクラと言つた。すでに、リンドを鬼か悪魔かと思つてしまふ程に稽古でしごかれ続けていたレンマは、少女が本当にリンドの孫であるのか疑つたほどである。もちろん、それを口に出した途端に地面にのされてしまったのは言うまでもないが。

彼女のその細い身体でリンドの稽古に耐えられるのかをレンマは心配していたが、その心配は結局杞憂に終わった。否、むしろ要らぬお世話であつたと言える。

何故ならば、彼女には、凡庸なレンマとは比べる事も愚かな程の、天性の剣の才能があつたからだ。

彼女の初めて握る剣、初めて放つ技。それを見たレンマは、人生において最も大きな衝撃を受けたと言っている。

今まで剣術に縁もゆかりも無かった少女の技であるはずなのに、その振る剣は実に華麗で、美しかった。

サクラ・ローアンとは、レンマが初めて、この世には絶対的に越えがたい、才能という壁が存在する事を知らしめた者の名前である。

それから五年、様々なことがあった。

サクラが入門して暫く経った頃。サクラの才能に嫉妬していたレンマが、彼女に辛く当たった後に、剣の稽古を辞めてしまったこともあった。その時は、自分のせいだと落ち込んでサクラまでもが剣を手放そうとしてしまった。

しかし、それを聞いたレンマは、慌てて彼女に待ったをかけた。何故か原因である筈の彼は、彼女が剣を辞める事を許さなかったのだ。

「おまえには、さいのーがあるだろ！　なんでやめるんだよ、もったいないじゃないか！」

「な、なによ！　さいのーのあるなしなんて関係無いじゃない！　いじわる！　いじわる！」

などと、言い合いをして、何故かレンマも稽古を継続することで丸く収まった。

十二歳となった時に、リンドに連れられて初めて迷宮の一階層に挑み、実力では負けるはずのない小コボルトに二人して追い掛け回されたこともあった。二人共あちこちを噛み跡と引っ掻き傷だらけにし、わんわん泣きながら逃げ帰ったりもした。

いつの間にか、二人の同世代の仲間が三人も出来て、共に迷宮を冒険する仲になり、パーティを結成することになったり。三人の個

性豊かな仲間たちと、様々な思い出や、冒険をした。最高に楽しい時をレンマ達は過ごしていた。レンマにとって、彼らと過ごす時はかけがえの無い物であったし、他の皆にとっても、きっとそうであっただろう

だから皆、昨日のギルドからの書類にレンマの名前が無かったことに憤ってくれたのかもしれない。だがレンマは、自分だけがギルドに参加を要請されなかった理由をおぼろげに理解していた。

半年前程からであろうか。レンマの階梯<sup>レベル</sup>が、仲間たちに追いつけなくなってきたのは。

今まで、必死に修練と努力を重ねて追いかけてきた仲間達に、徐々にレンマは追いつけなくなってきた。

自分には才能が無い。仲間たちには、黄金のような才能がある。それでも、共にあり続けることができる、夢を見ていたのかもしれない。だが、その幻想は昨日のギルドからの書類によって打ち砕かれた。

百二六、百二三、百十九、百二一。それぞれ、サクラ、ジャカ、クロウ、ハララの階梯<sup>レベル</sup>である。それと比べて、レンマの階梯は九九。皆は気にしない素振りを見せていたが、それでも、この階梯差でパーティーを組んでいく事が難しい事を悟っていたに違いない。そして、おそらくはギルド上層部も、そう判断したのだろう。

最近では、周りの冒険者達からも、自分が四人と共に居ることを疑問視する声が聞こえたりもする。彼らには、自分が仲間に寄生して迷宮に潜っている様にも見えるのかもしれない。

「そろそろ、潮時なのかもしれないな……」

レンマは、そう一人でつぶやいた。

現在、仲間たちは呼び出しに応じてそれぞれの招集先に出かけている。

レンマはその間、剣の稽古をしながらそんな事を考えているのだ。……何を、くだらん事を考えている」

そんな風にひとりごちたレンマに、横合いから声が掛けられた。じつとレンマの稽古を見ていた、リンドである。

彼女は、この五年で急に老けこんでしまい、今や自分で剣を振ることなどほとんど無い。もっばら、口で剣の指導をするに留まっている。

今は、レンマが一人、リンドの家の裏の広場で剣を振っていたところだった。

「手首の返しが甘い。踏み込みは浅い。他ことを考えながら剣を触れるほど、お前は器用ではなかつ」

「……ごめんなさい」

そう謝って、レンマは剣を構え直す。そして、改めて素振りを再開した。

剣を振る。

薙いで、払って、突く。

受けて、流して、切り返す。

ひたすらに振りかぶって、振り下ろす。

何かを振り切る様に、剣を振るレンマに、リンドは顔をしかめると、レンマに聞こえない様につぶやいた。

「『潮時』、か。相変わらず不器用な子だよ……」

リンドには、レンマが何を考えているのか大方の予想がついていた。

第七話 <過去編> (後書き)

めちやくちや難産中です……。

## 第八話 <過去編>

レンマの剣術の流派は、その名を至剣流と言う。遙か神代に遡るほど昔、一人の男が立ち上げた流派である。

彼はその身ひとつで修練を積み、いつしか神々ですら、その剣の下に敷く程の技を修得した。男の名は、至剣神プラグマ。人の身で神に至った、今や剣の神として崇められる者の名前である。

彼の創った剣術は今も尚、今世の多くの剣士たちに受け継がれている。『至剣流』は、今や大陸でも屈指の剣術の流派として、その名を轟かせている。かく言うレンマも、その連綿と続く流派を担う一人であった。

素振りを終えたレンマは、至剣流に代々伝わる稽古、『順繰り』と呼ばれる型稽古を行っていた。

大きな振りかぶりから繰り出される、強烈な一撃を放つ。

そして、息を継ぐ間もなく、次には流れるような連続技を繰り出していく。

さらに、畳み掛けるかのように鋭く抉る様な突き技を繰り出し、

そのまま身体が伸びきった所で、カウンターの動きを再現する。

レンマが繰り出していく技、動きの数々は多彩で、統一性が無い。一見、無理に一撃ごとに技の特性を変えようとする、効率の悪い稽古に見える。しかしこれこそが、至剣流に伝わる『順繰り』と呼ばれる型稽古なのである。

至剣流は実際には、一つの流派として系統だった剣術が纏まっている訳ではない。複数の 正確に言うならば、十の 種類の剣術が集合した流派。それが、至剣流と呼ばれる剣術流派の正体

である。

伝説によれば、至剣神プラグマが、当時存在した十匹の強力な魔物を倒すために、その魔物の弱点を突くべく、それぞれ十の系統の流派を編み出したのが、至剣流の起源であるとされている。そのため、それら十の流派　至剣流においては『系』と呼ばれる　は、それぞれ特徴的な技の理念を持っている。

十の『系』は、それぞれ『正道五系』、『邪道五系』、の二つに大別される。正道には、比較的素直な技が多く、邪道には癖のある技が多い。

それぞれ、正道に、一撃の系『陽』、連撃の系『華』、一突の系『獣』。抜技の系『水』、無手の系『龍』があり。

邪道に、斬撃の系『月』、乱撃の系『風』、連突の系『蟲』、返技の系『地』、投剣の系『鳥』がある。

それぞれの系に特徴的な技があり、至剣流を修める剣士たちは、自分に適性のある系をどれか一つ選び、それを修行するのである。そして、それぞれの系に存在する一から十の技　十番目の技は、その系の奥義とされ、『奥番』と呼ばれる　を習得することで、その者は免許皆伝となる。

至剣とは、己の一つを究極に極めるという意である。その為、同じ「至剣流」の剣士と言えども、その戦闘スタイルは多岐に渡るのである。

もちろん、自分に適性のある『系』を、最初から知っている人間など居ない。それはある意味では、己の性質を完全に知ると同意であるあるからだ。

実際に、体格や体質、または性格によっても変わってくる自分の特性を、判断することは非常に難しい。『至剣流』における剣士の最初の壁。それが、自らの『系』を見定めることなのである。

そして、それを見極める稽古が、レンマが今現在行なっている稽



古、『順繰り』である。

『順繰り』は、全ての『系』の技を、一から順番に振るっていく稽古である。正道の『陽』の一番目の技を振るったら、そのまま『華』の一番目へと移る。そして、十の系の一番目の技を一巡したら、次は二番目の技を振るっていく。

これを繰り返して、技の階位を挙げていく。そうすれば、自然と自分に合わない系統の技は撃てなくなってくる。いずれ最後には、自分に最も合っている「一つ」の『系』だけが残るといふ寸法である。普通の剣士ならば、一年も『順繰り』を繰り返せば自らの『系』を見出すことができる。だが、そんな中にも例外はある。

至剣流を習って五年になる筈のレンマだったが、彼は未だに自分の『系』を見定めることが出来なかった。リンドが、レンマの事を「才能が無い」と評するのも、この『順繰り』の成果が未だに出ない事が一番の理由である。

「くっ」

今も、レンマが『華』の系、その三番目の技を繰り返そうとした時に、剣があらぬ方向へ飛んでいってしまった。最近では、調子の悪い時には三番の技の辺りで、良い時でも四番の技までで『順繰り』は途絶えてしまっていた。失敗する系もその時によって違い、どうしても一つの系が突出するということは無かった。

レンマは、そのまま汗だけで地面に座り込む。どうやら、今日の稽古はここまでらしい。リンドが、レンマに手ぬぐいを投げてよこした。

「ふん、今日も相変わらずだねえ」

「はあ、はあ、『陽』がちよっと、調子いいかなって、思ったんだけど」

「昨日は、逆の系の『月』がやりやすいとか言ってただらうに」

「へ、へへ。『月』の方は今日は散々だったね」

そう言ってレンマは笑う。そんな彼の様子に、リンドはこめかみ

を押さえた。

「笑い事じゃないよ。……まったく、いつになったらこの子は私を  
楽にさせてくれるのかね」

やれやれと首を振るリンド。

そんな彼らのもとに、足早に駆けてくる物音が聞こえた。

「おや、もう一人の弟子も帰ってきたみたいだねえ」

そう言っつて、リンドは片方の眉を釣り上げてレンマを見やる。

「本当に、パーティを抜けるのかい？」

その問いに、レンマは微笑むと、しっかりと頷いた。

「レンマ、師匠、遅くなつてしまつてごめんなさい」

家の裏手の広場に、サクラが駆け込んできた。

「それで、どうだったんだ？ ギルドの呼び出しは」

レンマが、手ぬぐいで汗を拭いながらサクラに問いかけた。彼女は、乱れていた呼吸を整えると、ギルドであった事を話し始めた。

荣誉である招集の筈なのに、その表情はどこか冴えない。

「ギルド長のドリア様から、直々に依頼状を頂いたわ。返答は明日  
までだつて」

「ほお、あの耄碌じじいめ、まだくたばつてなかったのか」

リンドが不機嫌そうに零す。彼女は現役時代にギルド上層部と何  
らかの因縁があつたらしく、彼らの事をあまり良く言わない質だつ  
た。

そんな悪態をついていたリンドとは裏腹に、レンマは、黙つてサ  
クラの話を聞いていた。

「あの……、別にね、このクエストは強制つて訳じゃないなの。  
だから、断ることもできると思う」

サクラは、特に反応の無いレンマを訝つたのか、少し声を張つて  
言った。

「ねえ、レンマ。どうしよう」

「なんで僕に聞くんだ」

レンマは、サクラを厳しい目線で見上げた。

「その依頼は、僕にきた訳じゃない。皆に来たものだ。それに参加するかどうかは、君が決める事じゃないのか？」

その視線に気圧されたのか、サクラが詰まる。確かに、レンマの言うことは理にかなっている。『黎明騎士団』のリーダーとして、サクラはこのクエストを受けるか否かを決定する権限があった。

「でも、私達仲間じゃない。レンマ一人をのけ者になんて……きやっ」

のけ者になんてできない。そう言おうとしたサクラは、突然立ち上がったレンマに言葉を遮られた。

「僕をのけ者にしたくない！？ もう既にのけ者だよ。僕は」

「え、な、なんで」

突然激高したレンマに、サクラは狼狽える。

「この依頼が来るまで、気づかない振りをしていた。でも、やっぱり気づいてしまった」

レンマは独白する。

「僕は、君たちよりも数段劣る人間だ。君たちの様に輝くような才能もなければ、溢れる様な魔力も、人を超えた身体能力も持っていない。ただの、弱い人間だ」

「そ、そんなこと……」

「あるんだ。だから、サクラ」

レンマは、強い決意の籠った眼差しで、少女を見つめる。

「僕は今日を以って、『黎明騎士団』を抜ける」

そう言ったレンマは、どこか、重い鎖から抜けだした様な、清々しい表情をしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4824y/>

---

殲剣伝

2011年11月22日23時54分発行